

少年非行における「貧困」概念の再検討について

井 垣 章 二

一

かつて、非行の原因という場合、まず第一に貧困ということが考えられていた。しかし、同じ貧困な状態におかれながら、非行におちいらないものの方がはるかに多いという単純な事実の認識や、経済的にゆとりのある階層における非行の増大は、貧困以外の原因の探求に人々を専念させてきた。かくて個人のパスナリティや、パスナリティ形成にとりわけ重要な家庭環境、ことに親子関係が重視され、貧困は非行原因論における従来の優勢な地位を失っただけでなく、ある場合には殆んど無視されるまでになってしまったのである。しかし、貧困が必ずしも非行を生まないということによって、貧困は非行の原因でなく、あるいは殆んど重要にはかかわらないと断言してしまうのは、いきすぎだといわなければならない。そのような考え方でいけば、非行にかんするどの因子でも、結局、一切無効になってしまうであろう。もちろん、一つの結果に対して一つの原因だけがあるのではなく、非行は多数の因子の所産である。その一つとして貧困を軽視することはできない。ここで明らかにしようとする問題は、貧困がそのなかでも非常に有力な因子であるということである。

まず、非行の原因として貧困を重視する、われわれの立場が、十分な根拠を有していることを示しておこう。それは、

少年非行における「貧困」概念の再検討について

少年非行における「貧困」概念の再検討について

貧困家庭の少年がすべて非行にならないことが真実であるのと同じように、非行の最大の給源が貧困な人口部分に存在することも、やはり事実だからである。アメリカにおいては、非行多発地域はスラム街という貧困地域に重なり、遠くスラッシャー (F. M. Thrasher) やシマー (C. R. Shaw) がいふところのコーヘン (A. K. Cohen) やクロワード (R. A. Cloward)＝オーリン (Ohlin) にいたるまじ、こうした貧困地域の非行が中心的な研究問題になっている。⁽¹⁾ 同様のことがメイズ (J. B. Mays) やごく最近のウィルソン (H. C. Wilson) による研究によって明らかのように、イギリスについてもいえる。⁽²⁾ わが国においても、非行が都市の貧困な地域に集中する傾向は依然続いており、全国的データとして経済階層別少年刑法犯検挙人員にかんする統計をみても、下流および極貧層が全体の約六割をしめていることがわかる。⁽³⁾ しかも、非行のなかでも社会にとってもっとも深刻な問題を提出する慢性的非行や組織的集団非行は、この貧困な地域の非行の大きな特質であることも忘れてはならない。とにかく、非行は貧困な人口部分に多いという事実は、貧困が何らかの意味で非行に関連されていることを示すものであって、ここに、われわれの最初の出発点が存するのである。

近年の非行研究における一つの傾向は、どうしてある子供が非行になるのに、ある子供はならないか、という点に焦点を求めているようである。このようなことから、実にさまざまな数多くの因子が考慮され比較検討されてきている。彼のおかれた境遇、そのうけとり方、および彼の個体そのものも千差万別である以上、非行にいたる経過は人を異にすることによって当然違いがあり、この立場からは、たしかに、ある子供が非行におちいった原因はその子供に固有のものであることを、われわれは知っている。またウィルソンが「非行の基本的諸原因について語る時代は終わった。そんなものはないことをわれわれは知っている」⁽⁴⁾ という意味も、理解しないわけではない。ただここでは、われわれは、かかる微視的な立場に対して巨視的な立場にたとうとしているのであって、それが前者に、劣らず重要であることを主張したいのである。

かくて、ここでは非行をより広い社会的カテゴリーに基づいてとりあげ、全体社会的パースペクティブに基づき、貧困という条件に位置づけられた人口部分と非行との関連性を追求しようとするものである。単一の限定された社会的カテゴリーそれ自体のなかで多くのするどい差異を見究めたグリニック (S. & E. Glueck) は、この事実から、「非行の原因に含まれる文化的影響力の根本分析には、近隣あるいは居住地域を含む外部的かつ概括的な因子の比較に限定される研究がすべて不適切であることをはっきり示すものである」と述べた。こんにちの精巧綿密な非行研究の水準からすれば、われわれのアプローチは不適切かつ初歩的であるかも知れない。しかし、因子の細分化には、一方においては、全体を見失なわせ、社会における基本的諸力の重要な作用を看過する危険が含まれている。こんにちの非行は、現代社会の諸条件に対する青少年の反応であり、現代社会との構造的な連関を有しているのであって、かくて、全体社会的、巨視的アプローチは十分意義を有するばかりでなく、必要であるといわなければならない。

周知のようにグリニックは、いづれも貧困な地域の出身である、非行のある少年と非行のない少年と各々五〇〇名を、身体、心理、環境等のさまざまな側面について比較研究を行ない、非行に関連する諸因子をよりわけること成功した。この有名な「少年非行の解明」(一九五〇年)と「体格と非行」(一九五七年)とが合せて再検討され、「家庭環境と非行」(一九六二年)に整理展開された。⁽⁶⁾彼は、そこで、非行に関連する身体的心理的特性がどのような社会的文化的因子に関連されるかを明らかにしようとした。たとえば過密居住という社会的因子は、貧欲性、破壊性、言語知能劣位などの非行に関連する特性(潜在的犯罪性)に結びついていること、家計のやりくりのまずさや家庭内の秩序混乱は、同じく非行に関連する特性 (delinquency related traits) である破壊性、外向性、良心薄弱、鋭敏な感受性などに結びつき、また被扶助状態は、非行関連特性のどの形成にもかかわらないが、たとえば言語知能劣位など、すでに非行関連特性を有しているものを、非行に促進する影響をあたえる等、詳細な分析を行なっている。⁽⁷⁾彼はすでに「解明」において、非行のあるものとは、同様な貧困な地域にありながら、非行のあるものの方がはるかに不利な境遇に

少年非行における「貧困」概念の再検討について

あることを明らかにした。そして彼は、貧困を被扶助ということのみで考え、非行少年の家庭の方が一そう貧困であることを発見したが、過密居住、やりくりのまずいこと、秩序混乱、低い野望等々、前述の不利益な境遇というものの、その基底に貧困があることを指摘せず、つまり、彼は、それらを貧困が生みだすものとしてでなく、並列的に取扱っているのである。貧困がさまざまな生活上の諸条件に示されるものとすれば、彼の非行関連特性につらなる非行関連社会的因子の基底には、貧困という大問題が流れていることを知るのである。そして、かかる角度から、この貧困な地域をより裕富な地域と比較するなら、一そう大きな差異がその間に認められるはずであり、貧困の不利益な環境と非行というたての連なりが一そう明らかに成り、貧困と非行との関連性を明示することができるはずである。そして、これこそ、ここでとりあげようとしている問題なのである。もちろん、貧困が原因であるから他のものはすべて重要でないと主張しようとしているのではない。非行に關係するさまざまな因子と、貧困がどのようにに關連され、そのさまざまな因子のなかでどのような位置をしめるのか、追求するにとどまる。くりかえしていうように、これによって、一切の非行を全く完全に説明しきれるとは考えていない。

二

貧困が飢えとすれすれの状態であり、飢えのために盗みが行なわれたとしたら、この場合、貧困は非行の直接の原因であると考えられりする。しかしこんにちでは、こうした問題は特殊な例にしかすぎず、また、われわれは貧困と非行とを、かかる単純な直接連関で考えているのでもない。しかしぎりぎりの貧困が、わが国はもとより、ゆたかなアメリカにも、福祉国家イギリスにも、今もなお厳然と存在しており、かかる最下層地帯に非行が渦巻いていることを見のがしてはならない。たとえば、もしわれわれが少年院や教護院に収容された非行少年の家庭状況を調べるなら、驚ろくべき貧窮の事例を沢山発見できるであろう。またここに、「私たちが見聞し、実際に体験している貧乏は、相対的なも

のでも、比較されるものでもない。そんな生易しい貧乏は貧乏といえないのである。もっとぎりぎりに追い詰められた、生きられるかどうかというより、病気であってもその病気を考える事も許されず、目の前のパンにがつがつしなければならぬような貧乏である」という、「現代日本の底辺」の著者のコトバ（秋山健二郎「最下層の人びと」一九六〇年一六四ページ）も想いだして見る必要がある。ニューヨークのブルックリンのスラム街に深くわけ入ったサリスバリー（H. E. Salisbury）は、その界限の非行集団のリーダーのプロフィールを幾つか描いているが、中にはゆとりのある家の子もあるにはあるが、数日間満足な食事にありつけないで何時も胃の中がからっぽな少年を筆頭に、多くががつがつ⁽⁸⁾の貧乏であることを述べている。またイギリスにおいても、前述のウィルソンの調査研究は、大部分の非行少年家庭が生活維持水準以下（below subsistence level）にあえいでいることを明らかにしている⁽⁹⁾。

一方、このようなひどい貧困は、こんにちでは、殆んど消滅したといわれたりしている。たしかに、かつて人口の大きな部分にのしかかっていたかかる貧困は、多くの人々から取り除かれたことは真実である。しかし、それは前述のように、決して根絶されたのではなく、人口の限定されたある部分に定着し深く根をおろしたのである。裕富な階級には貧困は訪ずれることもなく裕富が循環し、恵まれない階級には貧困は世代から世代にうけつがれ、逃れることができない。さまざまな悪を社会に注入する貧困のハード・コアと称せられる最下層の人々の存在は、ゆたかな社会における現代最大の問題の一つとして、アメリカでは最近ことに注目をあびている。そこには、ミラー（W. B. Miller）グラッドウィン（T. Gladwin）ボーディン（K. Bouldin）ハンター（D. R. Hunter）の諸論文があり、有名なガルブレイス（J. K. Galbraith）や貧困の問題をさらにほりさげたハリントン（M. Harrington）の著作がある⁽¹⁰⁾。ことに、このハリントンが、アメリカ人口の約二五％、四千万から五千万が「人並の生活に必要な水準以下におかれ、身心ともに台なしにしている⁽¹¹⁾」というところは注目に値する。彼によれば貧困はなくなったのでなく、かくされているにすぎないのである。貧困にかんするこうした問題は、最終の章において再び述べられることになるう。

さて、先にも指摘されたように、貧困は、直接的、必然的に非行につらなるのではない。ここに貧困ということについて考えてみると、それはまず、祖末で不十分な食べ物や衣服、不良不衛生な住居等、物質的剝奪状態としてあらわされる。子供にとっては、ウイルソンのいうように、服さえも中古のうえ兄弟兼用で、自分に属するものは何一つなく、栄養も不十分で、まともな養育がなされないことを意味する。⁽¹²⁾ 彼はこの研究において、非行の原因は結局、放任 (neglect) すなわち家族が子供の養育に積極的な役割をとらないことにあるという結論に達したが、この放任は育児のための必要品の不足、すなわち貧困に基づくものであるとしている。そして、物質の不足にあえぐ不安定な生活に、母親の無関心と愛情の欠如が重なるとき、子供は非行への最大の危機に直面するという。裕富な家庭では、たとえ愛情のない無関心な母親があったとしても、子守を雇うとか親類をたよるとか色々な資源・手段を有しており、かくて子供は、前者のような、絶望的な物質的、精神的放任におちいってしまうのをまぬがれるのである。

かかる貧困状態においては、家庭というものは子供にとって魅力的な何ものもない。かくて彼等は街頭にでていく。そこには同じような望みなき少年がさまよい、彼はそれと合流する。あるいは既存の非行集団が彼を吸引する。そして彼等は、家庭ではなく、かかる同輩集団に殆んど没頭的な所属を決定するにいたる。サリスバリーのいうように、ギャングこそが彼らの唯一無二の所属集団であり、ストリートが唯一の世界となる。⁽¹³⁾ 先に述べた飢えのための盗みも、非行集団への参加も、つまるところ養育における放任にほかならないから、ここに、貧困は放任を媒介変数として非行に連らなるということが出来る。

これについては、わが国においても、たとえば佐々木氏は、一定期間中に神戸家裁の受理した非行少年について、家庭類型(抑圧・拒否・放任)と近隣環境と非行との関連性を追求し、非行と放任型家庭と貧困な地域との三者が関連されることを明らかにしている。⁽¹⁴⁾ いずれにしても、放任は貧困を非行に結びつける有力な媒介変数であり、ことに家庭的機能の問題に恵念するものの立場からは重視されるが、この放任ということを、物質的放任と精神的放任に分けてみ

ることを、提案してみたい。この観点から、よりゆとりのある階級の少年非行は、物質的放任はまぬがれているが精神的放任が、その場合、存在しているからであり、下層階級における場合は、物質的放任が精神的放任と関連され重なり合うことにより生じることができであろう。次にわれわれは、また別の角度から貧困を分析することによって、非行との関連性を追求し、新しい媒介変数を発見することに専念しよう。すなわち、それは、貧困を家族という限定された社会単位においてでなく、階級とか文化とかの、より広いカテゴリーにおいてとりあげることである。

三

少年非行は、つまるところ、児童発達や育児にかかわる問題でもある。育児とは文化の伝達にほかならない。以上のような放任は、社会が家庭に割当てた重要機能の欠損状態を意味する。ゆえに、犯罪者家族が子供に盗みをおしえ、この点で家族が統合されている場合は、放任ではない。しかし子供に注ぎこまれる価値が、社会の支配的文化価値に全く反していることによって問題である。このような場合は全く稀にしかないであろうが、下層社会は、支配的社会的それとは異った価値体系を発展させているということが注目されてきている。貧困は生活のなかの一面の現象にとどまるものでなく、一つの生活様式ないし文化であり、生活の全面におよぶ一つの統合体であることが、前述の貧困研究者の一致した意見であった。かくて、貧困の非行との接統点を、かかる文化、価値体系の存在に求める立場がでてくる。

さて、育児は、成人対児童の無色透明な諸関係に基づいて行なわれるものではない。文化の伝達を意味するそれは、その内容も伝達の様式も、その家族がいかなる社会の、そしていかなる階層に属するかによって異なっている。まず、文明社会と未開社会との間における人間行動の諸相に示される多様なコントラストを発見した文化人類学者や社会心理学者たちは、複雑な分化をとげた単一の文明社会においても、それは同様であることを知った。かくてデーヴィス(A. Davis)の諸研究や有名なウォーナー(W. L. Warner)の「ヤンキー・シティア」ホリングスベック(A. B. Holling

少年非行における「貧困」概念の再検討について

少年非行における「貧困」概念の再検討について

sheed)の「ヘルムタウン」等は、階層を異にすることによって、すなわち各階層のおかれた条件とともに、パースナリティ形成に重要な影響をあたえる育児目標と育児様式にかんして、大きな差異が認められることを明らかにした。⁽¹⁵⁾しかし、たとえばデーヴィスが、下層階級のより寛容な育児法に対して、中産階級のそれは、地位上昇、業績への圧力が児童に対する早期の、そして厳格な訓練をもたらし、それが児童のパースナリティに、ノイローゼをも結果する烈しい緊張と不安をもたらすなどと主張しているように、彼等の中心関心は、中産階級ひいては時代の支配的育児法にあるものようであった。この育児にかんする階層差の発見は、少年非行問題に重要なかわり合いをもつものと考えられ、かくて非行問題をめぐって、文化人類学者ミラーや社会学者コーヘンがこれを展開することになったのである。すなわち、下層社会価値体系と非行との関連性の問題である。

貧困は、衣食住の不足不十分という物質的側面とともに、精神的側面としての固有の価値体系を発展させる。それは、貧困という、手段の慢性的不足状態に対応する、いわば生活適応技術であり、貧困の精神的上部構造といえるものである。それは、貧困によってつくりあげられたものであるとともに、人々の意識や行動を規定する限りで、こんどは貧困を持続させるはたらきをする。このことは貧困社会の改良のためには、生活の一面でなく全面を、経済的援助のみではなくそれを越えたサービスを不可欠とするという、社会改良への重要な指針を示すものであるが、この問題はさておき、貧困の精神的環境側面として、下層社会価値体系が非行に接続する面を追求することにしよう。

まずコーヘンのいうところを中心に、下層社会価値体系を示すと、第一に、将来の、ことに職業的地位の向上や、そのための知識・技術にかんする努力や訓練に重要性をおかず、職業というものを現在の収入だけで考え、馴れ親しんできた現在の生活に安心を得ようとする。要するに職業の見透しとの関連における計画性、合理性に乏しく、将来の達成のための、現在の欲望の制限と努力とを重視せず、現在こそをもっとも有力な行動の指針とする。そして、準備によってでなく、ただちに生活向上をもたらす幸運に一そうの望みをかける。第二に、資力保持と独立独行を尊び他にたよら

ない個人的責任を強調せず、困難においては、「困ったときにはお互いさま」意識による安易な援助交換を行なう相互扶助を強調する。このことは下層の人々の、その第一次集団への殆んど完全な依存状態を意味するが、これに関連して第三に、礼儀・作法、その他対人関係の技術は、こんにち、さまざまな第二次集団の支配する社会をおよぐのに不可欠のものとして、中産階級の専心するところであるが、下層においてはかかる強調は全く行なわれず、第二次集団は回避すべきものとされている。第四に、攻撃の表現は直接的で、暴力、喧嘩等が問題処理の有効な方法として認められ、体力、男らしさ、タフであることなどが人間の重要な資質として尊ばれる。そして最後は、くすんだ日常生活から解き放つエキサイトメントの強調、ミラーは酒、賭博、セックスを、リースマン (F. Riessman) はさらに、たとえばテレビであれ車であれ、新しい財貨などは、そのものの効用よりも、このエキサイトメントということで購入されたりすることを述べている。⁽¹⁶⁾

こうした叙述のなかに、われわれは、社会の支配的価値体系との間のずれというものをよみとることができであろう。そして、この下層社会価値体系は、本来的に法の侵害を含むということで、ミラーは、これを非行問題に直接結びつけたのであった。というのは彼によれば、上記のように下層階級は特有の価値体系によって特質づけられており、それは法典に表され支配的社会を代表する中産階級価値体系とはいちじるしく異なることから、下層社会価値体系に徹することは、自動的に法の侵害を生むことになり、かくて下層社会非行は法を犯すべくして犯すのではなく、下層社会価値体系に第一次的に志向する行為の副産物なのである。⁽¹⁷⁾

しかしわれわれは、これが、すでに確立された非行集団については明らかに適用することは認めても、下層社会そのものを非行的あるいは準非行的な存在と考えてしまうのには、問題があることに気づくであろう。リースマンは、下層階級は古いしきたりをかたくに固執する伝統的側面と、その平凡な日常生活からの解放をもたらずエキサイトメントの側面との、相反する二面をあわせもっており、若い世代ことに少年非行は、伝統的側面ではなくエキサイトメントの

側面に一そうひきつけられると述べた。⁽¹⁸⁾そして、このように価値体系が、多様な、ときとしては相反する構成要素を含み決して単純一貫したものではないということは、単に下層階級の場合にとどまらず、他の階級についてもいいうることである。一般に社会は、こうした相反する面を有しつつ、それが統合され均衡がたもたれてスムーズな運行を続けるといえる。そのうえ、下層階級と中産階級とは、価値体系において、それぞれ相対し相反する全くの別ものではなく、多くの共通面を有していることも気づかなければならない。全くするどいコントラストを示すものが、多分に程度や強調点の相違にすぎないのかもしれないのである。これについてマツァーサイクス (D. Matza & G. M. Sykes) は、⁽¹⁹⁾「エキサイトメントないしスリルを大いに求め、地道な勤労を軽蔑してすみやかな成功の夢をいだき、男らしさの証しとして攻撃的でタフであることを強調する、非行集団の価値体系は、かかる特殊な集団や下層階級に限られたものでなく、いわば表向きの価値 (プロテスタンティズムの倫理) に対し、それとともに、より上層の階級自身も保持している裏側の価値 (subterranean values) にすぎないのであって、この種の価値は、映画、テレビ、雑誌などを通じて、またその他の娯楽や余暇活動を通じて、支配的社会そのもののなかに厳然と存続しているという。⁽¹⁹⁾このように考えてみると、非行集団の価値は、支配的社会のそれとは全くの別ものではなく、殆んどすべての人々の心をとらえている支配的社会の裏側の価値の強調であり、支配的社会では一そう節度をたもたれているものが、極度に押し進められ、あらわになっているだけにすぎないということになる。また、マツァーサイクスは青少年が有閑階級に属し、ことに非行少年の価値や行動は、かってヴェブレン (T. B. Veblen) の描いた上層階級の余暇活動におけるそれらと非常に似ているという。ヴェブレン自身すでに、ともに「習慣的な好戦的精神構造」のもち主たることによって「有閑階級」と「下層階級のならずもの」の類似性を指摘したことなどが、⁽²⁰⁾ここにおもいだされる。かくて、支配的社会の余暇生活のなかに生棲し続ける裏側の価値は、後述されるように、現代社会における「消費」の強調とともに、「余暇」の強調と相まって強力化されており、ひいては、それが非行の増大につながっているとも考えられるのである。これらは、少年非行が現代社会状

況に対する一つの反応にほかならないという、われわれの基本的立場につらなるものであるが、これはさておいて、前述のミラーの問題にもう一度かえることにしよう。

さて、ミラーにおいてもリースマンと同じく、非行は下層社会価値体系への、ことにある特定面への徹底であった。

かくてここに、もし下層社会文化のある側面が、ある意味で潜在的な犯罪傾向性を含むことを認めるにしても、それは、どうして下層少年が下層社会価値体系ことに犯罪傾向的側面に専心することになるかが、次の問題でなければならぬ。ところで、ミラーの立場からは、下層社会における非行の増大は下層社会文化が一そう確立され、下層少年が一そうそれに専心するということになるが、しかしこれは、社会の大勢にむしろ反するといえるであらう。マス・コミュニケーション、教育や社会福祉その他公共の諸政策は、中産階級価値体系に基づく社会の支配的規準を、少なくとも以前よりは下層社会にさらにおしひろげており、下層社会をよりそれに接近させてきているとみるのが妥当だからである。

同じ下層にありながら、とくにその上位のものは、中産階級価値を内面化し中産階級所屬に志向するもののあることは、よく認められるところであるし、またホワイト(W. F. Whyte)が下層少年を、自己の所屬する下層社会の価値から離れ中産階級価値に志向するカレッジ・ボーイと、下層社会生活スタイルに安住しようとするコーナー・ボーイとに分類したことは有名である。⁽²¹⁾これに暗示を得たバーカー(J. K. Barker)は、中層と下層の各少年が、この二点をめぐってどのような反応差異を示すか調査を行ない、両者は野望、倫理、満足にかんして異った力点をおくことを確認しながらも、すべて少年はある点ではコーナー・ボーイであり、また他の点ではカレッジ・ボーイであり、重なり合う面も多いことを発見した。コーヘンはこのデータにも基づいて、下層少年は、それは、もっとも純粋な形から下層社会価値との全くあやふやな併存状態においてであれ、何らかの程度で中産階級価値を同化しており、そして多くの下層民の、行動や子供を評価する規準は、中産階級とむしろ似ているのであって、つまるところ下層社会も中産階級的規準の支配下にあると主張する。⁽²²⁾

少年非行における「貧困」概念の再検討について

少年非行における「貧困」概念の再検討について

さて、貧困がその精神的上部構造としての価値体系を発展させると先に述べたが、ここに、ミラーへの批判とともに、貧困であることは、必ずしも下層社会価値の全面的採用を決定するものではないことが明らかにされた。このことは、価値体系と非行との関連性の追求において、われわれは価値体系そのものとしてではなく、それに対応する個人との関連において、すなわち、取捨選択にかんして、いわば能動的にかかわりあう主体の側から考察する必要があること、そして、この問題は、ほかならぬ準拠集団理論にかかわるものであることに気づくのである。

四

ミラーもコーヘンも、下層社会文化を、中産階級によって代表される支配的文化に対比させることによって、非行を説明しようとした。ミラーが下層社会価値体系そのものを非行に結びつけたのに対して、コーヘンは、中産階級価値体系の下層社会への支配、下層少年自身のその内面化に、非行形成の端緒を求めるのである。すでに述べたように、学校その他いろいろな文化伝達手段を通じて、下層少年は自己の所属する階級のそれとは異った中産階級文化にさらされ、何らかの程度でそれを内面化するにいたる。すなわち、中産階級の規準を採用し中産階級社会に自己の位置を見出そうとする。しかし、少年の現実の地位は両親の社会的地位に属しており、客観的には下層地位にとどまっている。中産階級の尺度では彼はその最末端にあり、しかも、もともと下層文化のなかで、それを吸収しつつ成長した彼にとっては、中産階級の地位を確保し前進させるのは、なみ大抵のことではないといわなければならない。かくて中産階級的位置に価値をおき、それに志向することは、自己の現在の地位に対する不満を意味し、何らかの形で解決されなければならない適応問題の発生を意味する。そして、この適応問題に対する一つの解決法が、非行だとコーヘンはいうのである。⁽²³⁾ もちろん非行が唯一の反応形態ではない。非常な困難にかかわらず、彼の言葉をかりていえば、「中産階級地位体系の挑戦」をうけいれ中産階級のしきりに従って「地位獲得競争」に専念するものもあれば、中産階級志向を放棄することによ

って安定したコーナー・ボーイに沈んでしまふものもある。⁽²⁴⁾ 非行、ことに非行集団は、コーナー・ボーイが中産階級価値体系からの撤退であるのに対して、それに対する意識的な挑戦を意味する。たとえば、コーナー・ボーイは学校がいやだからずる、休みするのに対し、非行少年は、善良な中産階級子弟は怠学しないゆえにそれを敢行し、盗みは単にものが欲しいからではなく、中産階級のルールに対する挑戦として、心理的な満足のために行なわれることを主張するのである。要するにコーヘンによれば、中産階級社会において尊敬すべき地位を獲得するか、その反対に非行になるかは、同じ源泉、すなわち中産階級価値体系の内面化にあるという。さて、彼のいうところからは、この内面化が進行すればするほど、現状にとどまる限りは地位フラストレーションがきびしくなることは判断できるが、しかしながら、前述の三つの異った反応形態がどうしておこるのか、必ずしも明確にされてはいない。すなわち、この内面化という共通な条件について、どのような違いがあるかが問題でなければならない。

われわれは、中産階級価値体系の基本構造が、地位前進の目標とその実現手段としての一定の努力の様式という統合された一組からなりたっていることに注目するとき、コーヘンがそれを一括して考えることによって見のがした、新しい角度が開かれることを知るのである。たしかに、下層社会に対する中産階級あるいは支配的社会的挑戦は、以上の目標努力体系を一丸として従うべきものとして強要する。しかし、強要されるものがすべてそのまま受けとられるとはかぎらない。もし中産階級価値体系の内面化ということによって非行を説明しようとするなら、そして、その構成要素として目標の側面と手段の側面とを分離できるのなら、このうちのいずれが内面化されているかということに、われわれは解明の鍵を求め得るはずである。カレッジ・ボーイは二面を合せ内面化している。むしろ力点は努力の方におかれているといえるかもしれない。そして他の二反応、安定したコーナー・ボーイと非行少年とは、コーヘンのいうように、一方が一切からの撤退であり他方が挑戦であるというのではなく、コーナー・ボーイは二面ともの放棄であり、非行少年の方は、現状に甘じんないうえに地位改善のための中産階級的手段をも拒否している以上、目標側面のみを内面化し、

少年非行における「貧困」概念の再検討について

努力の側面は内面化していないことができる。

しかし、中産階級が努力を強調するのは、かかる努力があつてのみ目標が達せられるからである。社会がその価値を高く評価する尊敬すべき職業、ことに専門職業は、高い水準の能力・知識・技術を要し、そのためには十分な準備、教育と訓練とを必要とする。こう考えてみると、目標の種類と手段の種類とは結びついており、切斷されることはできないように思われる。しかし目標には、次に述べるように、もう一つ別の側面が含まれていることを知れば、目標は必ずしも以上のようなかたちで受けとられるものとはかぎらないのであつて、もしそうなれば、それと結びついて存在する手段も、また不要となることが明らかにさう。すなわち、高い社会的職業的地位に対しては、それに応じた高い金銭的報賞があたえられ、それは高い快適な生活に示されるといふ、地位構成のもう一つの側面に気づくとき、目標とすべき地位を、高度な能力を要する職業としてではなく、経済的に恵まれた生活として規定することが可能となる。さきに、目標と手段とのいづれが強調されるかが問題であつたものは、ここでは、この目標が、下層少年にどのように規定されるかという問題となる。クロワード・オーリンは、何をもつて上位とし野望とするかは階級によって異なっており、上層階級における「生活様式と祖先」、中産階級における「徳性と金銭」に対して、下層階級は「金銭」のみに強調をおくことを述べた。²⁵⁾もちろんここには、後述されるように、金銭的成功に大きな比重をおく現代社会の特質的傾向も考慮にいれなくてはならない。ここまでくれば、われわれは次のような推論をくだすことができる。すなわち、下層少年のあるものは、中産階級地位体系の挑戦を、地位達成の中産階級的手段としてでなく、地位達成という目標そのものを内面化し、その目標を経済的地位と規定することによってうけとめる。彼の劣等な経済的地位（貧困）にとどまりつつ高い目標がすてられないことは、現状に対する不満を激化させ、適応困難に導く。合法的手段を多く欠く以上、このフラストレーションは非合法手段採用への大きな圧力を課し、そこに非行が発生する、と。

以上、下層少年の中産階級への志向やその価値の内面化の問題は、ことに非所屬集団と個人が関連される諸過程をと

りあつかう準拠集団理論にかんするものであるが、これを現在の地位にかんする適応の問題や不満の問題として焦点をおくと、準拠集団一般理論よりは、それに含まれる「相対的不満」(relative deprivation)の概念が一そう直接的にわれわれのテーマに結びつくことがわかる。「アメリカン・ソルディア」でクロース・アップされたこの概念は、独立変数としての地位と従属変数としての態度との間をつなぐ説明的媒介変数として用いられ、たとえば、ある立場にあるものの不満は、ある他人との比較において、彼らとくらべては自分は一そう被害をこうむっているという感情につらなるというのであった。⁽²⁶⁾ あらゆる点で何もかも違っているものは比較の対象とならない。ある面では類似性、共通性が存在し、あるいは存在していると知覚されなければならない。そして、他に対しての不満は、自分も同じ状態におかれて、当然だという意識あるいは願望がその底に流れている。かくて下層少年は、より上層の階級の、ゆたかな経済的、消費的生活の側面を比較の対象とすることによって、恵まれない自己の地位をますます恵まれない不当なものと感じるにいたるということができるのである。

同様な地位のあいだにとどまらず、自己の地位を越えた地位との比較を、コーヘンは民主社会の特質とし、そこでは人は、ことに同性、同年令のあらゆる他人と、その家族的背景や物質的境遇がどうであれ、比較を行なうことを述べている。⁽²⁷⁾ すなわち、それは、各自の階級的位置が厳格に固定された静的な社会ではなく、開放的階級構造の動的な社会の特質なのである。しかし、表向きには「平等と機会均等」を高らかに叫べんが、この開放的民主社会は、下層階級にとっては決して真実のものではなかった。すなわち、彼らは階級の上り口にはなかなか近づけなかったし、それにとりついたとしても、より資力があり支配的社会に有力なコネをもつ階級のものにとくらべて、大きなハンディキャップがあり、いろいろな現実の障害のあることを、彼らは知らなければならなかったのである。「ガレージの職工になった医者の子は、社会からぞっとするほどのあわれみの目をもってみられる」しかしこうした階級は「かなりの防衛的な力をもっている。医者の子がガレージの職工になることは稀である。たとえ彼がどんなに不適格だろうと彼はほそぼそながらも、何

とか自分の階級の中に、すれすれに生きることができようであらう。」このガルブレイスの言葉は、この場合よい参考となる。開放的、動的であるべき民主社会は、なお「世襲」というものの隠然たる力を存続せしめることによって、やはり閉鎖的固定的であって、下層階級にとっては上昇は非常に困難である。この事実はリンダ(R. S. & H. M. Lynd)が早くも「ミッドウルタウン」で見究めたところでもあった。⁽²⁹⁾

こんにち、社会が配分する有利な地位は、恐らく絶対数においては増えたには違いないであらうが、それを目指すものの量の大きさに比しては相対的に少なくなったといえよう。下層少年にとって上昇の道は余りにもきびしい。これに関連してクロワード・オーリンは、次のような観察をしている。民主社会においても報賞と機会の供給は限られており、資格あるもののほんの一部だけが成功するのみである。だからフォーマルな基礎においては等しく資格ある候補者のあいだで、何らかの基礎のもとに選考をする必要がでてくるわけであり、ここに、フォーマルな規準にまさるとも劣らぬ差別的なインフォーマルな規準(たとえば出身・階級)が登場することになる。下層少年は、中産階級子弟との競争において、もともととするどいハンディキャップを負っているうえに、文字通りバックなき孤軍奮闘、しかもその結果は報いられることも少ないのである。かくて彼らによれば、目標の強調に応じた報賞と機会の増加が、下層少年に提供されない民主化は、不当な損害を蒙っているという感情(unjust deprivation)⁽³⁰⁾、ひいては現社会体制への情緒的支持の撤退と、より能率的な非合法手段に向わせることになるという。またマートン(R. K. Merton)は、厳密に固定的な社会における貧窮者よりも、動的な社会における、それよりは恵まれたものの方が自己の運命に不満をいだくことが多いとい⁽³¹⁾い、『貧困』は、どこまでも全く同一の仕方で作作用する独立変数ではなく、明らかに社会的文化的な従属変数群の一つにすぎない。貧困それ自体とそれに伴う機会の制限だけでは、いちじるしく高い犯罪的行動をひき起すものではない」と主張しつつ、しかし「貧困とこれに伴う不利な条件——あらゆる社会成員の認める文化的価値のための競争場裡での——が支配的目標としての金銭的成功の文化的強調と結びつくとき、高い比率的行動を正常な結果とする」というところ

ろから、より貧困で機会の制限された東南ヨーロッパよりも、かえってアメリカにおいて犯罪の多い事実を説明した。⁽³²⁾

われわれは、以上の考察から次のようにいうことができるであろう。上昇への可能性は真実のものではなく、いわば幻影にすぎなかった。逸脱行動のためには、社会は完全な「不可能」や完全な「制限」のおしつけでなく、こうした「可能性の幻影」をあたえることが必要であると。全く不可能なものは欲求の対象とならないし、それを目標として維持することはできない。しかし目標が余りにも強調されるとき、可能なものとしてその目標は維持されていく。そしてこの可能性の幻影に結びついた目標の維持は、現実の不可能のまえに、なおそれが維持されている以上、別の解決策を必要とすることになるということができるのである。

五

結論にすすむまえに、われわれのテーマに本質的に結びつく残された二つの問題にふれておかなければならない。一つは、われわれの理論が、その種類または内容にかんして、少年非行と如何に関連されるかという問題であり、もう一つは、成人犯罪ではなくとりわけ少年非行に如何に関連されるかという問題である。もちろん、この問題は今までに各所で論じてきたところであるが、当然起るべき疑問に答え、さらに明確にしておく必要があると考える。

まず第一の問題として、非行はさまざまな反社会的行為の総称であるから、われわれの理論はそのうちのどのような種類の行為にかかわり、ひいては非行一般の説明にどのように関連されるのかという問題である。さて、非行はさまざまな行為を含むが、究極的には、人に対する攻撃と物に対する攻撃との二つに分けることができよう。こう考えると、われわれの理論が中心にかかわるところは、物に対する攻撃、すなわち財産犯だということになる。ところで、もしこの財産犯が非行のうちの主要部分を占めるのでなければ、われわれの理論は、少年非行一般の問題を多く説明しえないことになる。しかし事實は、少年非行の大半が窃盗であり、これに強盗、恐喝、詐欺、横領など物にかんする犯罪

を含めると、昭和三十七年全少年刑法犯検挙者約一六万三千のうち、六一パーセント以上、六大都市では六六パーセントにのぼり、一五歳以下の年少者では、昭和三十六年全検挙者約一〇万のうち、窃盗のみで八〇パーセントを越え、他の財産犯を含めると九〇パーセントに接近することがわかる。⁽³³⁾なお、これは検挙にいたった主要罪名統計であることを考えると、他の理由で検挙されたにせよ余罪として盗みをはたらいているものがかなり含まれており、さらに検挙や統計は、氷山の一角を示すだけで、ことに、少々の窃盗ぐらいでは検挙されないことを考えてみると、この部分はいちじるしく増大し、財産犯は少年非行の主要部分を構成していると断言してよい。しかもギベンス(T. C. N. Gibbens)が、窃盗が非行の大多数をしめ非行の代表的なものとしているように、このことは、わが国にとどまらず、全国共通な現象と考えられるのである。⁽³⁴⁾

われわれの立場からは、簡単にいって、欲しいものを合法的に獲得できないからこうした犯罪があり、その根源は、大いに、欲望をあふりたてる現代社会そのものの条件にあると考えるのであるが、これには一つの反対意見がある。前述のコーヘンは、たとえば窃盗について、非行集団に属する少年は、その物が欲しいからとるのではなく、中産階級のルールを破るにより、自分の能力と根性をためし、所属非行集団において地位と評判を獲得するために行なうとして、その没効利性を強調するのである。しかしながら、われわれの立場に反するこのコーヘンの主張は、非行少年が物の獲得のために非合法手段を用いるのであれば、それを無意味に消費してしまわずに、「かようにして獲得したものをもっと大事にするはずである」という観察に、実は根拠をおいているのである。⁽³⁵⁾そしてこれは、彼が非行を中産階級価値体系に対する挑戦として把握する立場に本質的に結びついている。これについては、すでに批判を加えたのであるが、この問題にかんしてのマツァー||サイクスの説明がこの場合有用であろう。彼らは、非行少年が、有意義な目的のために大事に使用するという、中産階級の意味において金銭を尊重しないからといって、決してそれに関心がないのではなく、それとは別の、彼ら自身のやり方で実に深くかかわっているのであって、すなわち金銭は、非行少年にとって、

力のデステュアとして顯示的消費 (conspicuous consumption) によつて浪費される何物かとして、大いに渴望されているといふ。⁽³⁶⁾ われわれは、盗みをはじめ財産犯を物が欲せられるゆゑの犯罪として、その功利性を無視してしまふことはできない。しかし一方、コーヘンのかかる主張も、全く無意味で誤っていると捨て去ってしまうことはない。彼は盗みという行為に含まれる、ある本質的側面を大いに強調したにすぎないとも考えることができるからである。すなわち、非行は物の獲得のための、物を守る秩序の破壊を意味する以上、社会の秩序は人や物を守る体系と考えると、それは現体制の基本的側面に対する攻撃や挑戦にほかならないことがわかる。たとえば、物をとることににより現体制の一角をうちくくことは、自己を支配的社会から分離し、それと対立して自己をおくことであつて、かくて人に対する攻撃、財物の破壊的攻撃等、反社会的行為一般がそれに接続することになる。われわれが功利的目的のための現体制への挑戦と考えるものを、コーヘンはいわば「挑戦のための挑戦」と考えているのにすぎない。

次の問題は、われわれの理論が、どのようにして成人犯罪ではなくとりわけ少年非行にかかわるのかという問題であつた。非合法的手段による目指されたより高き経済的地位の獲得、維持ということになると、かつての禁酒法時代のギャングにその典型をみるような、成人あるいは年長の未成年の、しかも成功した犯罪者や準犯罪的職業従事者か、あるいは、いわゆる「ホワイト・カラーの犯罪」などにおいてのみ可能となるものであつて、これを年少者の盗みなどに結びつけるのは大いに無理があるのではないかという疑問がある。簡単にいえば、たとえば、せいぜい十五歳ぐらいの子供の盗みを、「大望」とか「より高き経済的地位への志向」とかに関連させて説明できるかという問題である。

さて、この問題の解明の手がかりとして、まず、成人と区分すべき少年の特性と、そのおかれた環境的条件を注目してみよう。少年は過去に属する老人ではなく、中産階級地位の獲得に成功するか、きわめてみすばらしい準中産階級的存在になるか、あるいは全く無気力の底に沈んでしまふか、それとも犯罪者として確立するか、いずれかの方向に行きついた下層成人ではなく、未完成であり未来があるということに注目しなければならない。両親への殆んど完全な依

存の幼児期と自立・責任の成人期との間に位置して、彼らにはかつていない自由と余暇があたえられている。しかしその多くを、彼らは未来のために捧げることを強要される。この努力・準備を怠りこの時期を誤っては、将来、尊敬されるべき地位とゆたかな生活を享受することはできないからである。資力ある家庭の少年の場合は、資力によってかち得る豊富な教育機会と整備された環境、および中産階級的努力の体系を堅持する家族集団の精神的支持にささえられて、準備された道をまっすぐに進むだけでよい。その家族や階級と、学校と支配的社会とは、彼らの進むべき道について、一致して同じ方向を示してくれている。それらは彼らが道をそれないように守っていてくれるし、目指すべき将来の大きな実現可能性が、彼らが安んじてその道をすすむことを促進させている。しかし下層少年の場合、このようなお膳立てはできていない。たとえば彼の家族の価値体系と学校のそれとは往々にして分裂していたり、もし同列であっても、資源・手段の不足からはるかに困難な道をあゆまなければならない。学校が強いる中産階級的努力体系は、彼が支配的社会のただなかにしっかりと場所をもっているのではなく、その境界線にあることを思い知らす。少年からこの中産階級的的努力をとりさってしまうとき、あとに残るものは、前述の自由と余暇だけである。恐らく多くの場合、家の手伝いや労働が彼らを拘束するとしても、しかし、家族への全面的依存と成人としての独立と責任という、大きな拘束はこれをまぬがれており、やはり自由と余暇は多分に彼等の掌中にあるといえよう。それによってのみ将来が約束される中産階級的努力のルールからはずれるとき、彼は確固として所屬するところを失い、不安定な状態におかれる。青年は環境の子であるが、このような状態におかれた青年にとって環境は何よりも大きな力で彼をゆり動かす。すなわち、彼はこうした不確定のまま、沢山のものを欲しがることを求める現代社会のただなかにほうりこまれているのである。

この問題に関連して、ギベンズは、青少年層における所得の増大が、かえって犯罪を増大させているという興味ある考察を行なっている。たとえばイギリスでは、全勤労者所得のうち青年層（十五歳—二十五歳単身者）によってしめられる所得の割合が近年いちじるしく増加し、しかもその大部分が、すなわち税金と家計におさめる三分の一を除く全残額

が、衣服・靴・酒・たばこ・飲物・お菓子などの種類と、グラフィック・レコード・雑誌・映画など広い意味の娯楽とに、ほぼ半分ずつという具合に、彼らの自由に消費されている。この青少年のたくましい消費力は、現代マーケットにおける重要部分として、いわゆる「ティーンエージ・マーケット」を確立せしめ、青少年向きの新製品の生産・販売政策が押し進められることになり、かくて青少年は宣伝の渦にまきこまれ、ますますその欲望をあふられることになる。この場合、青少年の消費力を構成するものとして、彼のいう勤労所得に加えて家庭からの小遣いも考慮に加える必要があるろう。自分の欲しいものを自分で買うことは、大きくなってはじめてあたえられる青少年の特権ともいえる。そして高価なものについても、裕富な家庭では、準備された道を彼がまっすぐに進んでくれるために、要求に応じる必要がある。

青少年の消費力とティーンエージ・マーケットの確立が、子供でも大人でもない特有の青年文化(youth culture)を形成せしめるということとともに、以上の問題についてのギベンズの觀察のもっとも注目すべき点は、彼が、青少年の側におけるストレンスやフラストレーションの発生が、所得の向上そのものにあるのではなく、その高い水準と自分の水準との比較にあり、多くの金銭を保有しそれを消費している青少年が一方に存在するということ⁽³⁷⁾は、その立場にないものにとって、皆が貧しい場合よりはるかに耐えがたいものになるとして⁽³⁷⁾いるところである。青少年の消費力とティーンエージ・マーケットの強力化は、青少年の現代的生活水準を決定し、かわってその水準はすべての青少年の到達すべき目標として彼らに課せられているのである。われわれは少年非行を経済的目標と手段のギャップに関連される地位フラストレーションということで説明してきたのであるが、この目標は、「金銭的成功」「経済的地位達成」「大望」というような、普通理解されているような、いわば高遠な姿で下層少年の心をとらえるのではなく、かかるものの現代における強調が、社会にあらわされるさまざまな富のみせびらかし、はなやかな消費と余暇として彼の心をとらえる⁽³⁸⁾と考えるのである。未来があり、たとえば学校を通じて支配的社会的文化を強要される下層の少年にとって、実益の少ない中産階級的努力の体系よりは、かかる種類のものの方がはるかに強力に彼らを吸引するといえるのである。

六

以上、少年非行と貧困との関連性を、下層階級少年の経済的側面における目標規定と、その到達のための機会が制限されているにかかわらず目標が維持される場所に生ずる地位フラストレーション、適応問題が、その解決策として非合法手段の採用に導くということで説明してきた。しかしかかる問題は、下層階級固有の、あるいはその内部そのものから発生する問題ではなく、大いに現代社会そのものの条件に結びついているのである。すなわち、より高き地位を願ひ、この地位を金銭的成功、ゆたかな消費生活という側面で規定するのは、単に下層の人々に限ったことではない。すなわち、現代社会そのものが、それを強調し要請しているのであって、この現代の圧倒的流れに、下層社会はまきこまれているのにすぎない。社会はこう叫んでいる。人々はすべて自己の地位を前進させ、ゆたかな生活を享受すべきである。文明とはさまざまな財貨を生み出すことであり、人々はできるだけ沢山その恩恵に浴すべきである。豊富な余暇をもち如何に快適に贅沢に暮らすかが、こんにちの問題である」と。

こんにちでは、勤労のための余暇でなく、余暇それ自体の価値が強調されており、同じように、階級のもっとも重要な指標としてもちいられる職業と収入にしても、たとえば収入が高いゆえによい職業というふうには、職業よりも収入が重視され、それによって地位がランクされる傾向がある。そしてこの所得は、自分がこの世の恩恵を十分うけていることを確信し、また自分の社会的地位を表示するために、消費によって明らかにされなければならない。この際、「有閑階級」とともにヴェブレンの有名な「顕示的消費」の概念が想起されるであろう。ヴェブレンによれば、それは、もともと上流階級がその高さと威光を保持し自からを区別するための必須の手段であったが、程度は異にするとしても、中産階級はいうにおよばず「貧乏の水準——貧民窟すれすれ」の階級でも用いられるものであって、より上位のもののそれが社会の規範として強制的な影響力を行使する、というのであった。⁽³⁸⁾ この「顕示的消費」はガルブレイスが指摘する

ように、必需品だけではなく大量の不必要品をつくりだし、不必要品なるゆえに主として宣伝によって他律的に人々の欲望をつくりださなければならぬ現代の生産・販売組織に関連して、ヴェブレンの時代とはまた別の強調をもつことになった。すなわち、宣伝が人々の欲望の水準を決定し、これをうけいれる人々の生活水準の高さは、ほかならぬ現代文明生活の規準としてすべての人々のうえに君臨し支配することになる。かくて、かつて中産階級が堅持していた未来のための現在の欲望制限は、借金しても早く財貨を手にいれ、早く欲望を満足させる方式にとってかえられている。ガルブレイスがいのように、「昔の世界では、生産の増加とは、飢えた人にもっと食物を、寒い人にもっと衣服を、家のない人にもっと家屋を与えることを意味したが、今の世界における生産の増加は、一そう多くの優美な自動車、異国趣味の食事、エロ的な衣類、手のこんだ娯楽などの、あらゆる近代的な、感覚的な、不道德な、危険な欲望を満足させるもの⁽³⁹⁾」である。しかし、人間生活にとっての必要性という観点からは、それは、つまらないものであっても、宣伝がそれに欲望をもつことをおしえ、多くの人々がそれを所有することになるとき、その欠乏は満足な食事ができないのと同じように、現代に生きる以上、不幸といわなければならない。このような事態に対して、「貧困」とか「ニード」というものの意味も考えなおさなければならないことになるであらう。

社会の変化は人間の行動を変化させるのと全く等しく、食料品はじめ物品の購入についても影響をあたえる。肉体的能率——栄養——標準食事ということを中心に、生活必需品の購入費から算出された、絶対的、固定的な生活維持費(subsistence)によってのみ、ガルブレイスの言葉を借りていえば、欲望を他律的に生みだす一つの源泉としての「宣伝と虚栄」が「風靡している」⁽⁴⁰⁾社会における貧困を、説明できないのである。もともと人は栄養を食い、保温を着ているのではない。丈夫で寒さを防ぐのには十分であるとしても、流行おくれの衣服のために学校ではずかしい思いをする子供を愚かだと笑うことはできない。前述のように、宣伝と顕示的消費の現代における強調と支配は、ある水準の消費生活を社会的標準としてすべての人々に課し、ひいてはそれが人々のニードとなる。このニードの充足を大に欠いて

少年非行における「貧困」概念の再検討について

いる状態は「貧困」と呼ばなければならない。「人の所得が、生きていくためにはたりるものであっても、社会的な所得水準よりはるかに低い場合に、その人は貧困なのである。そのような場合には、彼は、品位をたもつのに必要最小限と社会的にみなされるものを持ちえない」のであり、かくて貧困は、タウンゼンド (P. Townsend) が主張するように、「平均の半分以上三分の二以下の所得の世帯数に基づいて定義される」⁽⁴⁾ということになる。全体が向上している以上、この全体との関係において貧困は位置づけられなければならないのであって、かくて貧困は、その時代その社会の一般的生活水準との関連において規定される相対的概念なのである。経済的側面においては一般水準と比較しての相対的な物質的剝奪としてあらわされる貧困は、より恵まれた人々との比較における相対的不満という心理的側面を結合している。そして、この相対的不満の概念こそ、貧困を非行に結びつける重要な媒介変数として注目してきたところのものであった。

われわれは、非行を、貧困それ自体からでなく、貧困を「金銭」「消費」「余暇」をいちじるしく強調する現代社会的状況との連関においてとらえることによって、相対的不満の概念を導きだし、これによって説明しようとした。簡単にいいかえると、それは、下層階級が現代社会そのものの影響をきびしくうけているということにほかならないが、しかしながら、最底最下層の階級などは、往々指摘されているように、地位改善への意欲が殆んどなく全く無気力であって、独自の文化を形成し持続させる限りで閉ざされた社会ともみられるということを考えると、彼らは現代の流れからはむしろ隔離されているか、あるいは影響をうけることが少ないのではないかという疑問も、一方では起るかもしれない。しかし、くりかえしているように、豊富のなかの貧困、貧困にありながらゆたかな生活の存在を知らざるをえないところに、現代における貧困あるいは下層階級の問題の特質があるのである。この問題の特質は、スラム住民の住宅調査において、彼らの願わしい住宅のイメージが、広告であらわされ、またきれいな住宅地域に一般にみられる新式の住宅に合致したというバック (K. W. Back) の発見や、⁽⁴²⁾下層社会の独自性をつとめて強調しながらも、それは完全に隔絶さ

れたのではなく境界線に位置しており、「彼らはゆたかな社会の映画をみ、雑誌を読んでいるのだ。それは、彼らが国内の追放者にほかならないことをおもいしらす」といい、また「心理的不満 (psychological deprivation) は貧困の主要な構成要素であり……かような貧困な人々に起っている恐るべきことがらは、突如として、自分はのけ者だと思いつたことである。この瞬間、ゆたかな社会は、現実であることも希望であることすらもなくなってしまうて、彼らを嘲弄するものとなる」というハリントンの観察に端的に示されている。⁽⁴³⁾ ミニス (M. S. Minnis) は、インディアン・レザーベイションという特殊なコミュニティにおける非行研究において、そこでの青少年の無軌道な行動が、そのコミュニティの貧困と、著しく制限された未来とに起因していることを述べているが、レザーベイションといえど、ゆたかな社会のなかに、その影響力の範囲に含まれているのであって、別の未来の存在 (ゆたかなアメリカ) の知覚が、自己の未来や地位についてのフラストレーションを惹起せしめていることに気づかなければならない。レザーベイションがインディアン少年の知る唯一無二の世界であるならば、如何にその社会が貧窮していようと、飢えのための盗みは起るにしても、大量の逸脱行動を起させる、適応問題は生じないであろう。

最後に、われわれの貧困と不満との相対性のこの把握は、われわれの貧困非行原因論が、単に最下層の人々のみにとどまらず、中産階級のある部分にも適用されることを暗示している。ゆたかな社会では、貧しいものはますます貧しく悲惨になったが、ある程度の経済的ゆとりというものが満足をあたえてくれることも、ますます少なくなったといえるからである。近年の中産階級非行の増大は、もちろんそれによって一切を説明することはできないであろうが、中産階級ことにその下位にあるものの、この意味での貧困化、相対的不満の事実、その一因が求められるにちがいない。そして、少年非行が経済成長にかかわらず増加し、さらに経済的不況期よりも好況期にむしろ増大する傾向も、恐らくは、このことが関係づけられるであろう。非行は、現代社会における金銭と消費、それに余暇と裏側の価値の強調に関連されることによって、現代社会それ自体の産物であるということが出来る。それは、現代社会が人々に課した、ことに経

少年非行における「貧困」概念の再検討について

今昔異行とある「貧困」概念の再検証のうえに

済的に下層にある人々を語った一つの重要な問題である。

- (1) F. M. Thrasher, *The Gang*, 1927; C. R. Shaw & H. D. McKay, *Juvenile Delinquency and Urban Areas*, 1942; A. K. Cohen, *Delinquent Boys*, 1955; R. A. Cloward & L. E. Ohlin, *Delinquency and Opportunity*, 1960.
 - (2) J. B. Mays, *Growing up in The City*, 1956; H. C. Wilson, *Delinquency and Child Neglect*, 1962.
 - (3) 岡田三十八博士「犯罪社会学」二二三頁以下。
 - (4) Wilson, op. cit., p. 24.
 - (5) S. & E. Glueck, *Unraveling Juvenile Delinquency*, 1950, 邦訳『少年犯罪の解明』二二七頁以下。Physique and Delinquency, 1957.
 - (6) Family Environment and Delinquency, 1962.
 - (7) Glueck, op. cit., p. 115-25.
 - (8) H. E. Salisbury, *The Shook-up Generation*, 1958, Chap. 4.
 - (9) Wilson, op. cit., p. 124.
 - (10) W. B. Miller, *The Implications of Urban Lower Class Culture for Social Work* (Social Service Review, Dec., 1959)
- T. Gladwin, *The Anthropologist's view of Poverty*; K. Boudin, *Reflections of Poverty* (Social Work Forum, 1961)
- D. R. Hunter, *Slums and Social Work* (Child Welfare, Nov., 1962)
- J. K. Galbraith, *The Affluent Society*, 1958, 鈴木龍「ゆたかな社会」
- M. Harrington, *The Other America: Poverty in the United States*. 1963.
- (11) Harrington, op. cit., p. 2.
 - (12) Wilson, op. cit., p. 146.
 - (13) Salisbury, op. cit., p. 37-9.
 - (14) 佐々木謙「非行における家庭・近隣・行動傾向の関連性」『調研紀要創刊号』昭和三十七年三月。
 - (15) A. Davis, *American Status Systems and the Socialization of the Child*, (American Sociological Review, Jun. 1941.)
- Socialization and Adolescent Personality; Social Class and Color Differences (Readings in Social Psychology, T. M. Newcomb, Ed.)
- W. L. Warner & P. S. Lunt, *The Social Life of a Modern Community*, 1941; A. Hollingshead, *Elmtown's Youth*, 1949.

- 後二巻の「ついで」 R. S. Cavan, *The American Family*, 1953. 247頁。その著者の問題を非常に要領よくまとめている。(後五巻一八冊)
- (16) Cohen, op. cit., p.95-9. Miller & W. C. Kvaraceus, *Delinquent Behavior: Culture and the Individual*, 1959. (その「ついで」は Cloward & Ohlin の前掲書247頁。以下同様。 p.66-67.) F. Riessman, *the Culturally Deprived Child*, 1962, p. 28.
- (17) Cloward & Ohlin op. cit., p. 65.
- (18) Riessman, op. cit., p. 28.
- (19) D. Matza & G. M. Sykes, *Delinquency and Subterranean Values* (*American Sociological Review*, Oct, 1961,)
- (20) T. B. Veblen, *The Theory of Leisure Class*, 1899. 小原俊「有閑階級の理論」岩波文庫。二二四頁。
- (21) W. F. Whyte, *Street Corner Society*, 1943.
- (22) Cohen, op. cit, Chap. 4.
- (23) Cohen, op. cit., p. 119.
- (24) Cohen, op. cit., p. 128-30.
- (25) Cloward & Ohlin, op. cit., p. 93. コーレンのいう意味での中産階級志向、欲求水準は、安定したスラム住民よりも非行者家庭の方が低いことをグリッチは「解明」で明らかにしている。これについてはクロフォードその他多くの批判がある。
- (26) R. K. Merton & A. S. Kit, *Contribution To the Theory of Reference Group Behavior* (*Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier"* Ed, Merton & Lazarsfeld, 1950)
- (27) Cohen, op. cit, p. 122.
- (28) ガルペンティン前掲書 三二五ページ。
- (29) R. S. & H. M. Lynd, *Middletown in Transition*, 1937. 彼は、そこで自己前進の第一歩として、工場に職を得ることを「難しきなり」、経営・技術的地位は特権階級から補充せられ、単なる職工から工場主の快適な椅子に遷する一筋の階段はもはやなく、労働者にとっては、特別な場合を除いて、登っていく上部階級は明確に制限せられ、登ることが一そう困難になったことを明らかにしている。 p. 70-71.
- (30) Cloward & Ohlin, op. cit., 119-21.

今非行にならぬ「貧困」概念の再検討について

少年非行における「貧困」概念の再検討について

- (31) Merton & Kitt, op. cit., p. 90.
- (32) Merton, *Social Structure and Social Theory*, 1957. 森東吾他訳、一三六ページ。
- (33) 犯罪白書、昭和三十八年、二二一ページ。二三八ページ。法務省は、窃盗は四分に一人の割合と最近発表した。
- (34) T. C. N. Gibbens, *Trends in Juvenile Delinquency*, 1961, p. 19.
- (35) Cohen, op. cit., p. 36.
- (36) Matza & Sykes, op. cit., p. 714.
- (37) Gibbens, op. cit., p. 25.
- (38) ヴェブレン、前掲書、八四—八五ページ。
- (39) ガルブレイス、前掲書、一二七—二八ページ。
- (40) ガルブレイス、前掲書、一八二ページ。
- (41) P. Townsend, *The Meaning of Poverty* (*British Journal of Sociology*, Nov., 1962.)
- (42) K. W. Back, *Slums, Projects, and People*, 1962, p. 52. Harrington, op. cit., p. 20-30, p. 178.
- (43) M. S. Minnis, *Social Structure and Delinquency* (*Social Forces*, May, 1963.)

(1963. 10. 9.)